

原油価格高騰とアジア・プレミアム

東洋大学 経済学部 教授 小川芳樹

NYMEX の WTI 原油価格は、8月に入ると騰勢を強め、8月12日の終値は1バレル66.86ドルとこれまでの最高値を記録した（8月24日にエクアドル問題等で67.32ドルの新高値を記録）。サウジのテロ懸念もあったが、あいかわらず製油所の事故やガソリン在庫の低下など米国の製品需給タイト化懸念が高騰の主要因である。2004年以降はアジアの精製余力もぎりぎりとなったため、米国の局所的な一憂であっても世界中が振り回される状況にある。

さて、1992年から2003年まで10年以上もアジア向け中東原油価格は欧米向けに比べて1バレル1～1.5ドル割高で推移し、いわゆる「アジア・プレミアム」と呼ばれる問題が存在した。2004年初めの30ドル超えから現在の60ドル超えへ原油価格は急騰したが、この高騰の中でアジア・プレミアムは一体どのように変化したのであろうか。

欧州向けと比較すると、2003年の年間平均でアジア向けは1.5ドル割高であったが、2004年の年間平均では0.4ドルまで縮小した。2004年9月から11月の上昇局面でアジア向けが低い値となった結果である。米国向けと比較すると、2003年の年間平均ですでにプレミアムは0.5ドルまで縮小し、実は2004年の年間平均では▲1.4ドルと逆転した。2003年でもアジア向けが低くなる月がいくつか出現し、2004年は上述の期間を中心にその前後も含めアジア向けが大幅に低くなった結果である。

2004年9月から11月の上昇局面では、WTI原油の高騰をブレント原油がまず追随できず、ドバイ原油はさらに追随できず低い水準にとどまった結果である。中東産油国による価格調整項の設定がこの動きに対応するものではなかったため、アジア・プレミアムの縮小あるいは逆転につながった。

2005年に入ってから7月までの平均でみると、アジア・プレミアムは欧州向けとの間に0.75ドル、米国向けとの間に0.92ドルと再びプラスで拡大しつつある。この期間の原油価格は40ドルから65ドルへ上昇局面であるが、2004年後半と異なってWTI原油、ブレント原油の動きをドバイ原油も追随している。中東産油国も上昇局面の調整項設定に手馴れてきたとみられる。その意味でアジア・プレミアムは復活しつつある。

産油国の調整項は、本来的には原油品質からくる精製コストの格差と輸送コストの格差を反映して設定されるべきものである。1990年代の調整項設定はまさにその枠組みを保持できたが、2000年以降の米国を中心とする原油価格高騰でその枠組みにも綻びが生じている。1980年代後半から継続してきた原油価格の基本構造を見直すべき時期が迫っているのではなかろうか。